HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	佐藤信著，『明日の協同を担うのは誰か　基礎からの協同組合論』，日本経済評論社，2014年，230頁
Author(s)	棚橋，知春
Citation	フロンティア農業経済研究，19(1)，52-54
Issue Date	2016-04-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66096
Type	other
File Information	19-1-7_tanahashi.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

佐藤　信　著

『明日の協同を担うのは誰か　基礎からの協同組合論』

（日本経済評論社、2014年、230頁）

福島大学　**棚橋　知春**

本書の概要

本書は、資本主義経済において特殊な組織体である協同組合がどのような内的・外的条件でその性格が変容するのか、また本来の目的を維持しつつ、運営を続けるためにはどうすれば良いかという問題意識で、筆者の博士申請論文を基礎として書かれている。「シリーズ社会・経済を学ぶ」の内の一冊と言うことで協同組合論の入門書といえる構成の本である。協同組合についての初歩的な知識から、協同組合が社会経済的要因によりどのように性格を変えてきたか、日本の戦後の生協を事例として具体的に学ぶことができる本となっている。本書では、協同組合について事業体としての側面と運動体・組織体としての側面の間に内部矛盾が存在するが、これを統一するものが民主的運営であるという視角から分析を行っている。以下では本書の内容について紹介し、最後に若干のコメントを加えたい。

本書の構成

本書の構成は第Ⅰ部と第Ⅱ部に分かれ、第Ⅰ部「協同組合の基礎理論」（第１～３章）で「協同組合の基礎を学ぶための最低限の事柄を網羅」し、協同組合の内部にある「矛盾をめぐる研究課題の整理」している。第Ⅱ部「戦後生協の展開構造と展望」（第４～11章）では「生協に限定して、歴史的な経過と現在抱えている諸問題、将来の方向性について整理」し、現在抱えている諸問題としては、食糧問題・食品安全問題、組合員の性格変化、役職員についての課題について取り上げている。

各章の内容を簡単に紹介すれば、第１章「協同組合と協同」では、協同組合とは何かという説明から入り、協同組合が持つ本来的な性質から、運動体としての側面と事業体としての側面の二面的性格があることが示される。また、なぜ協同組合が資本主義経済の中で生まれ、発展してきたのか歴史的な経過を示した上で、今日の日本における協同組合の現状が紹介されている。

第２章「協同組合研究の焦点と到達点」では、分析視角の枠組みについて説明している。従来、協同組合研究では、協同組合の持つ運動と事業の二面性から二元論的な対立として議論されることが多かったが、本書では二面性を統一的に把握する視角として「矛盾論」的アプローチから分析がなされている。この矛盾論的アプローチでは、上記の二面性から生じる内部での対立を統一させる手段として矛盾を用いている。矛盾は、片方を排除することによって使用される敵対的矛盾と、双方の調和の結果として存在し、実現自体が解決である非敵対的矛盾の2つに区分されるとしている。本書では対立する運動と事業の担い手をそれぞれ組合員と役職員とし、両者の相互浸透による他者の理解を基礎とした民主的運営により、非敵対的矛盾を実現しているとする。

第３章「資本主義経済の発展と協同組合」では、協同組合が組織された歴史的背景を踏まえ、協同組合が社会経済環境の変化により外部から影響を受ける性質を内部要因として抱えていることを指摘している。

以下、第Ⅱ部はこの第Ⅰ部を踏まえて、戦後の生協を事例としてその展開が書かれている。第４章、第５章「生協の歴史展開（１）・（２）」では、第２次世界大戦以降、現在に至るまでを大きく４つに区分し、事業経営と組織運営の関連を矛盾論的アプローチにより分析している（①45年～55年、②55年～70年、③70年～80年代半ば

（以上が第４章）、④８０年代以降（第５章））。各期において社会経済を背景とした組合員運動の内容、事業形態の展開、そして運動と事業との間の相互連関について分析されている。

第６章「生協の業態と個配事業」では、生協の業態について特に1990年代以降急速に進展した個配事業について事業・運動の両側面から分析している。特に共同購入事業との比較において組合員参加・不払い労働に着目して整理がされている。

第７章「食糧問題と生協」では、生協事業の中心となる食料品供給について、特に産直に注目して記述されている。生協では、食糧問題への対応が運動の中心であったため、事業としても食糧供給事業が生協事業の中心となってきた。そこでは「安全・安心」が重視されてきたために生産者や産地と結びついた産直事業が展開されてきた。しかし現段階では低価格化が指向されていることも明らかにされている。

第８章「食品安全問題と生協の対応」では、生協による食品安全の取り組みの変遷をその外部要因となった社会情勢と関連させて特徴を明らかにしている。

第9章「組合員の性格変化と生協組織」では、社会全体と組合員の年齢・世帯構成、就業状態の比較がされている。また、組合員の加入動機の変化についても分析している。その結果として組合員が多様化し、生協の「企業化」・組合員の「顧客化」が進んでいることが明らかにされている。

第10章「生協役職員をめぐる諸課題」では生協における職員の問題として、賃金体系と人事教育制度改革を中心にとりあげ、また役員問題としては「生協私物化」「粉飾決算」を事例として組織運営問題を扱っている。この章ではこれらの問題がそれぞれ職員と役員、常勤役員と組合員の間の対立と統一という視点から分析されている。

第11章「明日の協同の担い手」では、社会経済の変化に伴い生協の担い手が変化し、その結果参加意識の低下が進んだことを踏まえた上で、職員・組合員それぞれの展望を示している。また、協同組合の目的を果たすために、既存の協同組合の枠組みを超えたNPOや社会的企業なども含めた運動を「新しい協同」とし、その特徴について考察している。

本書へのコメント

浅学非才な上に地域農業を研究してきた評者であるため、生協を事例にした本書に対して適切なコメントをできる自信はないが、若干の感想を述べさせていただきたい。

本書はシリーズのタイトルにあるように、「学ぶ」という観点から、協同組合の性格の変遷を様々な観点から追うことで、協同組合の理念と実際上の課題を深く学ぶことができる。生協について不勉強な評者でも一通りの論点に触れることができ入門に最適な一冊だったのではないかと感じている。

さて、本書の特徴は協同組合を、外部との相互関係をもつ運動ととらえ、かつ内部矛盾を抱える存在として扱っていること、またその矛盾を統一する仕組みとして、協同組合が持つ特徴である民主的運営を重視していることの2点である。このことにより、とらえにくい生協の本質が理解しやすくなっている。

本書では、生協運営の様々な段階で抱える共通の大きな課題として組合員の多様化とそれに伴う組合員の「顧客化」、生協の「企業化」を提示している。多様化について中心的に触れられているのは第９章であるが、ここでも多様化した組合員の各層によって現在、具体的に何が生協へ求められているのかについては直接的には触れられていないことは残念な点である。生協と同様の問題について、農協については自給的な農家と専業的な大規模農家、準組合員等でそれぞれ求めるものに

違いがあるとされ対応がされている。本書で生協事業にとって重要であると指摘されているが、生協組合員の多様化の具体的な内容を把握することが協同組合の研究にとってもまた、重要であろう。

また、本書のタイトルにあり、第11章で取り上げられている協同組合にＮＰＯや社会的企業も含めた「新しい協同」が、現在の資本主義経済の展開の中でよりよい社会のために重要であることは言うまでもないことである。しかし目的や担い手が重複している一方、「共益・共助」と「公益・公益」とそれぞれの組織形態が手段としてもつ特徴は異なる点については本書が協同組合を対象にしていることもあってか触れられていない。本書の成果を踏まえた上で、その違いがもつ意味や意義を把握しておくことは、多様化が進む担い手や様々な条件をもつ地域にとって有意義だろう。実態の詳細な分析に加えて「新しい協同」のように大きい枠組みで社会をとらえることは研究上、重要である。大きな飛躍があるが、ある意味では農村地域でのこれまで研究されてきた様々な組織・団体は「新しい協同」との共通点を持っているのではないだろうか。農協はもちろんのこと、従来の農業関連団体や機械利用組合などの組織を広い視点でとらえることもできるのではないだろうか。